

# 一週一夜物語

小栗虫太郎

青空文庫



一、 サヒーブ・オーグリー  
大人 O'Grig

僕は、「実話」というのが大の嫌いだから、ここには本当のこ  
とを書く。

というものの、どうもこれが難題なので、弱る。作らず、嘘で  
なく、じつさい僕が聴いた他人の告白なんて——よくよくあまのじ天邪  
鬼やくでないかぎり、いえた芸ではないと思う。

とにかく、これはいわゆる実話ではない。あくまで、僕が経験  
し、じつさいに聴いた話である。

で、冒頭に、僕の経歴の一部を明らかにする。これまで、経歴

不明の神秘性がある——とかなんとか云われるのは心外であったが、この機に残らずぶちまけてサバサバとしてしまいたい。

それは、中学を出て一年遊び、翌大正八年五月から十一年二月まで、横浜山下町一五二番地、メーナード・エス・ジェソップ商会というのに勤めていた。この店は、ブロンズ扉ドアや、ボード・ジョインターや特殊錠、欄間調整器らんまなどの建築金具を輸入し、輸出のほうは、印度、蘭印方面へ日本雑貨を向けていた。もちろん僕は雑貨掛りのほうであった。

ところが、大正十年十一月九日、年に一度は、顧客廻りに出かけるジェソップ氏の伴をして、はじめて北回帰線を越えカルカタに上陸した。

インド  
印度だ。

頭被ターバン、綿布、Maharajah 《マハラジヤ》の国だ。僕は、象に  
 乗り蛇スネークチャーマー使チャーマーいを見、Lingam 《リングム》の、散在する印度  
 教寺院を見歩いた。しかし、そのバトナやカルカッタにはなんの  
 物語もない。それから、汽車で南行、中部印度のプーリという町  
 にきてはじめてこの話が起る。

そのこの宿は、ホテル「風ウインド・パレスの宮」という洒落しやれた名であつた  
 が、部屋は、Apadravya 《アパドラヴィヤ》という裏町さくらぎに向いて  
 汚い。

露台が、重なり合っている狭くるしい通りは、また、更紗さらきや麻  
 布の日覆いでしたの土が見えない。しかし、夜は美しい。更紗を

洩れる灯、昼間は気付かなかつた露台の影シルエツト、絵、パタンやブルマンの喧囂エロクエント・コムマースたる取引は、さながら、往時バグダツドの繁栄そのものである。

平太鼓タム・タムが聴える……。それを子守唄に、寝ればまた「一千一アラビアシ・ナイト  
夜物語」を夢みる。バクストの装置デザイン、カルサヴィナが踊るシエヘラザーデの陽炎かげろう。まるでそれは、僕がHaroun《ハルーン》  
al《アル》Raschid《ラシッド》で、ここへ彷徨さまよいたようであつた。

ところが、そうして滞在三日目の夕のことである。

窓からみると、砂堤の蔭に首絞め台のようなものが見える。それが、最初の日から気になっていたので、ジェソツプ氏を誘い散

歩がてら出かけていった。が、側へゆくと、それは Masula 《マスラ》 という名の、車井戸だったのだ（この Masula 《マスラ》 というのは、あるいはこの地方の小舟の名であったかもしれない）。  
 いずれにせよ、いまは時経て記憶に定かでない）。

水牛が、釣瓶繩つるべなわを引くと、絞め殺されるような音を立てる。

陽は落ちんとして、マハナデイ三角洲デルタはくらい靄もやのしたにあつた。  
 するとそれから、驟らをつないであるアカシヤのしたまで来ると、  
 とたんにに、そばの草叢くさむらがガサガサつと動いた。

（眼鏡蛇コブラかな？）

それは、慄ぞつとするのと飛び退くのと、同時だった。しかしジエソツプ氏は、からだをかがめ顔を地にすれすれにして、とおく

残光が、黄麻畑の果にただようあたりに透<sup>すか</sup>した。

間もなく彼は、手の泥を払いながら顫<sup>ふる</sup>える私をながめ、

「ありや、君、人間の手だよ」

と、嗤<sup>わら</sup>うのだった。

そこで、ミスター・オーグリー Mr. O'Grille が安堵したことは云うまでもない。

しかしジエソツプ氏は、顎を撫でながらじつと考え込んでいる。

僕は、その腹芸を怪訝<sup>けげん</sup>に思い、とにかく、騾<sup>けろ</sup>を引いてきてお乗んなさいとばかりにすると、

「君、ちよつとあの男を呼んで来てくれんかね」

と云うのだ。

「でも……何ですか？」

私は、なにがなんでも得体が分らないので、躊躇するとジエソ  
ツプ氏は手をあげ、

「いや君は分らんだろうが、これには理由わけがある」

と、声を低め、云い訳顔に語りはじめた。

「このね、マハナデイ川の上流には、ダイヤモンド鉱地がある。

昔とちがつて、いまは菱靡凋落いびちようらくのどん底にあるが、それでも、

カーネリアンカーネリアン、ガーネット、石榴石などに混つてたまたま出ることがある。それ

もなんだ、マハラジヤ藩王の経営だから採取法が古い。警備も、南阿の

諸鉱地とは、てんで比較にならないのだ。鉄条網もない。電気柵も  
ない。南阿じゃ、着物を縫目まで解いて身体検査をするというが、

「ここじゃそれほどでもあるまい」

「では、発見した鋤夫が逃げられるじゃありませんか」

「そこなんだ。宝石が、たまたま出るとそれを持ち逃げして追手を避け避け、外国船に売り込む……。いや、あれがそうだとは、必ずしも云わんよ。しかし、万事こうしたことは、カン一つだからね」

それが、ジエソップ氏の持つ、最大の悪癖だった。賭けたがること、相場が好き、ボロ株が好き、おまけに、角力が好きで光風が鼻屑であった。しかし、それも考えれば理由のないことでもない。草叢という、眼鏡蛇の通路に這い寝そべっているのは、なんぼなんでも並々のことではないからだ。

やがて僕は、主命もだしがたく、草叢に近寄っていった。そう

して、怪人 Ram 《ラム》 Chand 《チャンド》 君の出現といふことになつたのである。

そこで断つておくが、ジエソツプ氏は印度語が喋れない。僕も、Indian 《インディアン》 Press 《プレス》 Reader 《リーダー》

の初級くらいのところ、けだし僕を引つ張り役にしたのも、理由がその辺にあるらしい。が、僕とはいえ……ペラペラやられたら冷汗ものところが、運よく、その青年は正統の英語が喋れた。

かれはすぐ飯を食わすというと懶るだそうに起きあがり、のそのそと僕のあとを跟ついてきたのである。

それから、僕が日本語でやる生擒いけとりの報告中、チャンドを見るジエソツプ氏の眼に、失望の色が濃くなつてきた。

なり  
服装は汚い、それも泥だらけで芬々たる臭気だ。が、顔は、  
印度アールヤン族の正系ともいう、どう見ても、サンブルプール  
あたりからのダイヤモンド鉱夫ではない。しかし、人は見かけに  
よらぬという——おそらくジェソップ氏の腹も、同じだったろう  
と思われる。

とにかく、チャンドの気品は、絶品というに近かった。たとえ  
て云えば、キップリングの『Naulakha』《ナウラーカ》に出てく  
るラホールの王子——といっても、僕自身には褒め過ぎとは思え  
ない。

しかし、そのチャンドにはなんの用もないのだ。といって、ブ  
ラブラさせては不安がるだろうというので、おもにジェソップ氏

の身廻りの用をさせていた。がその間、僕には大命が下っていた。それは、チャンドをそれとなく探ることで、ジェソツプ氏は、またまたダイヤならずば<sup>トパーズ</sup>黄玉石くらいの夢を見ていたらしい。

しかし僕は、いつかチャンドの別の方面に、興味を持つようになった。それは、ジェソツプ氏に対しても決して大<sup>サヒーブ</sup>人とは云わないこと、印度人が、自らを卑くして駱駝<sup>らくだ</sup>のように膝を折る、あれがチャンドの雰囲気にはないのだ。

やがて、イギリス嫌いの僕は、この青年が好きになった。実際ジェソツプ氏のような、ズボラで人の良い英人はいないのだから、僕には、クライヴもヘースチングも村井長庵と大差ないのだ。そんなもんだから、チャンド君に打ち込んだせいもあり、今度は彼

の健康が氣遣われてきた。

はじめ来たときは、二、三日食わないとこんなかと思つたのが、五日、十日となつても少しも回復しない。

憔悴、脱力、眼に力はなく、氣懶るげけだに動いている。僕もしまいには、心配になつてきて、あれこれとなだめすかしては問い訊した結果、ついにある夜口を割らしてしまつたのである。

それは、トパーズ黄玉石でも、ダイヤモンドダイヤでもなかつた。カーマ・ストトラ愛 経 の印

度、シヴァ※婆の破壊をいまだに疑わぬ印度——その板挟みに、哀れやチャンド君はペシヤンコにされ、青春の泉をからから涸々にしてしまつたというのである。

この告白は、たぶん惰氣と暑さで、諸君を困らしめるにちがい

ない。それほど、印度も暑いが、この話もそうである。

二、なぶり 嫩味絶々

(以下、ラム・チャンドの告白)

ミスター・オーグリー

Mr. O'Grie あなたは、紳士にも似ず執拗しつこいですね。さ

つきは、僕の生家もなにも訊きかないと、約束きしたくせに……。

だが、教育を受けた、学校だけはお話ししましょう。

それは、インド印度の北西部カシユミールの首都、スリナガールにあ

るブリスコー氏の学校というのです。ここには、印度教徒も回教徒もキリスト教徒も、すべてこの地方の上流の子弟があつまるの

です。

聴いて御覧なさい。Tyndal-Briscoe's School 《ティンダル・ブリ  
スコーズ・スクール》といえば、たいていのものは知っていま  
す。

で、そのの、教程を終えてから何をしたかというと、まず助教  
師、そして最近は、校主の知己のヘミングウエー嬢が、本土から  
来られたについて案内役となりました。

その、ミス・ロバータ・ヘミングウエーは、財団の有力者であ  
る国こくじし璽しようしよ尚書しようしよの令嬢です。まだ二十二か三くらいでしょう。匂  
いはないかわりに、清純な線があります。

ところが、方々見歩いてこの町に来たとき、偶然ガンデイの示

威運動が起つたのでした。町は、兵士の発砲以来、廢墟のようになりました。雨が降る、汗が蒸し暑さに腐るように匂う——、事の起りはそういう晩だったのです。

そうそう、宿は「神主」ラジュラーナ館でしたよ。そして僕は、そのときへミングウエー嬢の部屋にいました。外は、ザクザクガチャガチャという音で巡邏じゆんらが絶えません。しかし僕は、地図を見ながら、南行のスケデュールを組んでいました。と、隣りから、湯のはねる媚めかしい音がする。いま、ミス・ヘミングウエーが御入浴中なのです。

するとそこから、

「パドミーニ、パドミーニや」

とお呼びになる声がします。

尻あがりの、声を聴いただけでも一人娘の、びりびり蟲のつよいところが触れてくる。

しかし、下婢のパドミーニはここには居りません。私は、なんと入浴中のレデイにお答えしていいものかと、惑っているうちに、二度目のお声です。

「パドミーニ、パドミーニはいるんじゃないの、そこに。駄目よ、黙って、拗すねていたって、ちゃんと分るんだから……」

と、湯の面にびしやりと何かを叩きつけたらしいのです。

「パドミーニ、パドミーニってば……」

そういつて、ミス・ヘミングウエーはしばらくのあいだ、耳を

澄ますようにじつと湯の音をさせませんでした。

「じゃ誰よ、そこにいんのは？ さつきから、かさこそ音をさせ  
ていて、給仕<sup>ボーイ</sup>？」

「いや、僕です。パドミーニは、さつきからここには居りません」  
「ああ、なんだ、チャンドさんか」

しかし私は、爽やかな、処女を粧<sup>いろうど</sup>るさまざまな香りに、こう隣  
ったことを、たいへん有難く思いました。

とやがて、

「チャンドさん」

と羞<sup>はじ</sup>らったような声で、

「ちよつと、あんたにお願いがあるんだけど、……実はパドミー

二がいなくて、お願いするんだけど……、そこにある、三角海綿アをここへ持ってきてくれない？」

とたんに、私は、ぱちぱちつと瞬きました。ゆらゆら、鍵穴を洩れる湯気が、肢体のように妖あやしく見えます。

「でも……」と、やつと返辞はしたが、子供のような答えです。すると、ヘミングウエー嬢は、

「アラ、厭なの。じゃ、何かそこでしていんじゃない？ 抽斗ひきだし

や、下着入れを覗いているんだったら、今のうちに蔵しまうことよ……

……」

やがて私は、パドミーニが出しわすれていた三角スポンジを手に、把手ノツブをやんわりとひねっていました。が、実のところは、動

作に現われているような、そんな落着きはないのです。

(なにを……ミス・ヘミングウエーのこれは、意味するのだろう。処女が、娘の媚態ともいう羞恥心を捨ててまで、自分に、浴室に入れとは、戯れだけと云えないことだ。)

と、妙な自負心に、私はからだ中浮いてしまったように……ああ、ミスター・オーグリー Mr. O'Grigie、わら 嗤いますね。が、それも、あなたはミス

・ヘミングウエーを知らないからです。

つぶらな瞳、ひとみ 弾力のあるふつくらとした頬、ほほ 顔もからだも、ほどよく締っていて、はず 弾みだしそうです。

神品ですよ。触れようとしても出来ぬものはことごとく神品です。

私は……だが、いかなる場合でも、ブリスコーの生徒でした。

「じゃ、ここへ置きますから」

「そう。有難う。でも、ちよつとの間まなら、ここにいてもいいわ」  
私の、そのときの驚きは何ものにも例えようありません。しかし、ミス・ヘミングウエーは、続けさまに云うのです。

「どう私、頭のほうもそう悪かアないでしょう。湯気で、あんたの眼鏡が曇つて、なにも見えないのを知ってるんだから。見えて？ ……私が、いま、どんなことをしているか」

と、はげしい湯の音がして飛沫しぶきがかかると、淡紅色ときいろの、暈ぼやつとした塊かたまりりが、眼前まへの靄もやのなかにあらわれました。

揺れる、くねる。

私は、咽喉のどがからからになって自分の喘あえぎが、ガンガン鳴る耳のなかへ響いてきます。

「では御ゆるり」

私は、やっと咽喉をうるおし、これだけを云いました。すると、ヘミングウエー嬢は、

「マア、あんた、あんたは割と世帯染みてんのね」

そう云つて、くすんとお笑いになったようです。が、その頃から、鏡玉レンズが室へやの温度に馴れ、やっと靄はが霽はれはじめてきました。と、灌水シャワーのひらいた、夕立のような音がする。

それも、湯のほうひねが捻ひねられて、もうもうと立ち罩こめてくる。せっかくの、喘ぐような瞬間がまた旧もとへ戻つてしまったのです。

「お気の毒さまね」

ミス・ヘミングウエーが、嘲るように云いました。

「なにがです」

「知っているくせに。……もつと黒檀紳士は、明けつ放しの人かと思つていたわ。つまり、四十碼ヤードスクラムからスリークオーター・パスになつて、それを、私がカットして好蹴キックをタッチに蹴出す。一挙これじゃ、三十碼ヤード挽回ね」

「分りませんね。何です、それは」

「分らないの、マアいいわ。いいから、出てないと水を引つかけるわよ」

私はさんざんに翻弄され、それでも、若葉を嗅ぐような、爽さわやかな

い匂いをつけて戻ってきました。

それから、部屋へ戻って寝台にころがっているうちに私は、四肢五体を揉みほごされるように狂わしくなってきたのです。

(なんのためだ……なんのために僕を浴室なんかへ呼んだのだ?)  
それは、あるいはミス・ヘミングウエーの気紛れかもしれないが、いちがいにそう云い切ってしまうには、あまりに、奔騰的だ、噴油だ。鬱積しているものが悶もだえ出ようとしているのか。

(ふむ、よくあることだ。よく、青葉病といって、急に憂鬱になるか、それとも、見境いなく齧かじりつくような、ニムフオマニー亢進症ニムフオマニーになるか——。とにかくあれは、殻を割りたくても、割り得ない悩みなんだ。あの娘は、心のなかじや充分熟れ切っている。そこへ、破

ろうとしても、させないような潔癖さがあるのだ。そうだ、たしかに処女性の病的なものがある。(

と、決めてしまうのも、独り合点でしょうか。分りません!!

ミス・ヘミングウエーと、私とのあいだには人種の壁がある。そしてこれも、一夜のほんの戯れだけででしょうか。

私は、そうして右せんか左せんかと悩み、奇怪な謎を投げかけたヘミングウエー嬢の行為を思いあぐみ惑乱に悶えておりました。

ああ、O'Grie 《オーグリー》、あなたは、それからの私をお嗤わらいになるでしょう。暇さえあれば、留守を狙ってヘミングウエー嬢の部屋へ忍び込み、部屋に残っている薰香かおりに鼻をうごめかしたものです。O'Grie All is glowing, burning, trembling.

馬鹿です。しかし天はこの馬鹿に恵み給うたのか、翌日も雨、その次も雨、しかも暴動の気配が絶えず、ときどき銃声がする。風もない、ただ雨が滝のように地を打っている。

ところで、その日からはじまる八日のあいだが、カリーの女神を祭る精進日となるのです。

水浴をし、あらゆる慾望を絶ち、子羊を犠牲にする。そしてもって、破壊の女神カリーをお慰め申しあげるので。けれど、いまここでは祭典どころではない。雨に暴動、加えて湯気のようなおそろしい湿気です。

しかしそうした時、ごろごろだる懶いままに転がっている姿は、だんだん心も獣のようなそれと同じになるのではないでしょうか。

私も、自分ながら、理性を失わんとしているのが分ります。やがて、暗い空がいつそう暗くなり、雨脚も消え、煮られるような夜となりました。

ところが、その夜ヘミングウェイ嬢に、神経痛の発作が起りました。前年、ポロの競技中落馬が原因で、その後は、暑さ寒さにつれ、右肩が痛むのです。それでパドミーニと交代に、患部の湿布をかえておりました。甲斐甲斐しく、腕まくりしてギユツとタオルを絞る、すべてが、われながら驚くほどマメだったのです。とその時、通りをザツザツと、靴音でない一群が通つてゆく。

「アツ、あれ、きつと何だわ」

「なるほど」

「あらッ、私まだなんにも云ってないのに……」

私は、ときどき失敗をやつてはぎゆうぎゆうな目に逢わされ、それが久しく外道的な快樂となつていゝのです。いま私は、右手でタオルを抑えながら、左手は、ミス・ヘミングウェイの蓑たばこに灰受けを捧げている。

ああ、いかに場合とはいえブリスコーの生徒が、落ちたにも百面相とはなつたものです。

「ああ、そうか」

私は、ポンと手を打つかわりに灰皿を上げて、静かに蓑灰はいを落させる。

「分りましたよ、非常時の馬鹿力というのが、あれほど、お痛み

だったのが土民がとおると、瞬間ケロリと忘れてしまう……。いや、気が張つとりますと、感じないのですなア」

「そうかしら」

「処世上、その点には、つどつど考えさせられます」

「じゃ、処生哲学ね」

ミス・ヘミングウエーがクスンと笑いながら、

「あたし、まえにはチャンドさんを、ちがう人かと思つてたわ。口説き<sup>くど</sup>上手で、パドミーニのような娘を悦<sup>よろこ</sup>ばせるかわりに、かならずただじゃ済ませない。よく、世間にあるあの類型ね？」

「……………」

「ところが」

と、云いながら、ヘミングウェイ嬢は痛そうに顔をしかめはじめたのです。けれど、まだそれは忍べぬというほどのものではないらしい。

「ただ、あんたは実にまめだと思う」

「まめですか。僕は」

「そう、ほかにも良いところが、きつとあるんだろうと思うわ。だけど、なにしろまめすぎるんでほかが分らなくなるの」

彼女一流の毒舌が、このときはまったく苦痛のなかから発せられませんでした。

「パドミーニ、パドミーニを呼んで」

腰の痛みだけは、私にもさすが触らせない……しかしパドミー

二は、いつになつてもこの室へ戻つてこない。<sup>へや</sup>

(パドミーニがいない。)

それをさつきから、私はミス・ヘミンググウェーに、思い出させまいとしていたのだ。彼女はいまコック部屋にいる。回教徒だから、カリーさまのこの日にも、なんのお咎めもあるまい。

そしてその間、私が万事取り仕切つてまめまめしく働き、ほとんど、触らんばかりの身近にいる愉悦を、パドミーニがきて妨げられまいとしていたのだ。私は、心のなかで、チエツと舌打ちをしました。ところへ、

「呼んで……、ねえ、早く」

とヘミンググウェー嬢が、胸をそらし、苦しそうに呻きはじめま

した。

「はやく、チャンドさん、引つ張つて来てよう」

「ですが」

さすがに私も狼狽うろたえ気味になつて、

「考えてみますと……あれから、もう四、五時間も見えないので  
すから」

「そう、そう云えば……」

と、痛みを忘れたように、不安気に眼を据え、

「あれ、何時いつだったろう。パドミーニは、食堂から出て、たしか  
……」

と、だんだん、ミス・ヘミングウェイの顔は羞らつたようにな

り、観念の色がなに事かを決めようとししました。

とその時、通りのどこかでワアツと喚声があがると、数発の、銃声とともにおそろしい音が部屋に起りました。窓硝子が木葉微塵となり、どこか、蒲団マットのしたからキナ臭い匂いが立ちのぼってきます。

その瞬間、せつかくの機チャンス会がぶち壊れてしまったばかりか、ミス・ヘミングウエーは、恐怖に駆られワアツと泣きながら、地下室の酒倉へ逃げ込んでしまったのです。

つまりこれは、カリーの女神の嘉よみし給わなかつたことでしょうか。それから、ミス・ヘミングウエーは相変らずの態度で、お機チャンス会と、叫ばせられたのも何度かありました。が、私には、

印度教徒の戒律を思わぬわけには、ゆきません。最初の夜の、神意的破壊的の銃声が、もし啓示としたならばこの次はどうでしょう。

ああ、O'Grie 《オーグリー》、ほんのう煩惱はたけり、信仰は脅かす。  
しょうじんけつさい精進潔斎のその日に、にょにん女人を得ようとしたのは、返す返すも悲しいめぐり合わせでした。

私はそれから、来る日来る日うつらと送りましたが、しかし、希望はまだ九日目にあります。精進明けの、その日には何事も自由です。そして雨も、その前々夜にはからつと上がり、町にはすでに火薬の匂いもありません。朝の風が、きび黍畑をひたす出水のうえを渡り、湿原で鳴く、さい印度犀の声を手近のように送ってきます。

ヘミングウェイ嬢は、この朝高台公園ハイ・パークの遊歩場へゆき、八時頃には、木蔭を縫う馬蹄の響が聴えてきました。

そこで私は、とつて降した彼女の手をかるく握りますと、どうでしょう、そのうえにピシリと鞭が降りました。

ああ、私はとたんに自己を失い……思わぬ変り方、あまりな恥辱にそのまま面おもてを伏せ、ホテルには入らず一目散に駈け出しました。

それからの放浪です。

私はつくづく、祭、祭に縛られる印度民族インドが厭になり、と云つて、遠い祖先の収穫をいのる声もぎがふり挽ろうとしてもどうしても離れないのです。おお、O'Grie《オーグリー》、なに事にも印度

民族はこのデイレンマに困くるしめられます。信教と、民族発展とに背反するものを持つ……。

おお、O'Grie《オーグリー》、お国へ行きましたよう。

しかし私は、聴いているうちにも、ほかの事を考えていた。それは、ミス・ヘミングウエーのことで、ああさせた、Aphrodisiac なものは何事であろうか。近傍の……日スールヤ天の堂でも見たのか。そこには、奇矯のかぎりを尽す群神の嬌態がある。それとも、麝じ香やこう、沈ちんこう香そうけい、素馨そけいの香りに——熱帯の香気に眩暈を感じたのではないか。

いずれにせよ、八日間精進のことは知っていたにちがいない。

そして、雨後の冷気が、ムラ気と火遊びを鎮めるに充分だった――と。

やがて、夜が明けかかり闇が白みはじめたころ、私は、菩提樹の梢をとおして、暁にふるえるユニオン・ジャックの翩翩へんぽんたるを見たのである。印度インドの朝、しかし真実の黎明れいめいには遠い。私はチャンド君の寝顔と見くらべ、そう呟いたのであった。

# 青空文庫情報

底本：「潜航艇「鷹の城」」現代教養文庫、社会思想社

1977（昭和52）年12月15日初版第1刷発行

底本の親本：「地中海」ラヂオ科学社

1938（昭和13）年9月

初出：「新青年」博文館

1938（昭和13）年8月号

入力：ロクス・ソルス

校正：Juki

2008年10月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 一週一夜物語

小栗虫太郎

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>